1950-60年代の勤労青少年に関する研究の現状と展望

―― 大衆娯楽雑誌を手がかりにした研究に向けて ――

阪　本　博　志

0．はじめに

高度成長期を中心とする戦後日本の社会変動の影響を最も受けた層は、若年層であると考えられる。この若年層を考えるとき、1950-60年代の勤労青少年は、次の2点から無視することのできない存在である。それは第1に、同時代の若年層においては勤労青少年こそが多数派であったからである。第2に、この勤労青少年こそが復興から高度成長にかけての日本の生産力を実質的に支えていたと考えられるからである。

それにもかかわらず、今日その存在に光が当てられることはすくない。1.以降で概観するように、戦後若者文化の歴史社会学的研究においては高学歴の若者の文化の連続性が記述されることが多い。勤労青少年を対象した研究においても個別の領域に対する研究はなされている[1]ものの、勤労青少年文化全般が対象とされることは乏しいように思われる。本稿の目的は、勤労青少年研究を巡るこのような現状に鑑みて従来の研究を簡単に概観し新たな視角の研究を展望することである。

「勤労青少年」は70年代以降今日も存在する。だが、本研究が対象とする勤労青少年文化は、「平準化された大衆社会」が到来し大学生と勤労青少年との境目がその文化においては曖昧になる以前のものである。

1950年代半ばから70年代初頭にかけての高度経済成長は、耐久消費財の普及・高度の教育水準と文化の享受を可能にし、国際社会に占める日本の位置をいちじるしく向上させた[2]。この高度成長に伴う産業構造の変動・職業構造の変動・従業上地位の構造の変動・大都市人口比率の増加・核家族比率の増加・中間層意識の肥大・「ポスト工業化」は、日本を

---

[1] たとえば、敗戦後の青年団運動等を明らかにした北河賢三『戦後の出発――文化運動・青年団・戦争未亡人』青木書店、2000年、集団就職については加瀬和俊『集団就職の時代――高度成長のにない手たち』青木書店、1997年、女中については清水美知子『〈女中〉イメージの家庭文化史』世界思想社、2004年、など。

[2] 富永健一『日本の近代化と社会変動――テュービンゲン講義――』講談社、1990年、228、229頁。

「平準化された大衆社会」[3]に導いた[4]。富永健一によると、この「平準化された大衆社会」とは、「家ゲマインシャフト（家父長制家族）と村落ゲマインシャフト（自然村）が解体し、ブルーカラーとホワイトカラーの区別がほとんど消滅し、旧中間層が減少し、かくして国民の大多数が「新中間大衆」（村上泰亮、1984）となって均質化し、伝統的なしきたりがもはや継承されがたくなっているような社会構造と社会意識の状態である」[5]。

以下、1.では、戦後若者文化史研究においては学歴エリートの文化の連続性の記述に重点が置かれていたことを明らかにし、教養主義が支配的であった学歴エリートの文化の変遷を整理する。

2.では、これまで戦後若者文化史研究においてその議論の対象とされることが乏しかった、1950-60年代の勤労青少年が同時代の社会学者によってどのように研究されていたのかを概観する。

3.では、この1950-60年代勤労青少年文化の対極には、学生文化を位置づけることが出来る。1.でも紹介するように、1950-60年代の大学生においては教養主義が支配的な文化であったが、「平準化された大衆社会」の到来とともに、70年代以降衰退していった。教養主義の媒体が総合雑誌であったのに対し、勤労青少年文化の主要な媒体であった、大衆娯楽雑誌『平凡』の簡単な紹介をおこなった上で、勤労青少年の文化と同時代の学生の文化の対比をこころみる。

1．戦後若者文化史研究における学歴エリート中心の若者像

1970年の第43回日本社会学会で、シンポジウム「青年問題」が開かれた。この内容は『社会学評論』22巻2号に掲載された。これ以降70年代前半社会学における青年論の活発な展開が見られた[6]。また、社会学者のみならず、宮本みち子・岩上真珠・山田昌弘の「脱青年期」論[7]につながる小此木啓吾の「モラトリアム人間」論[8]や、斉藤環の「ひ

---

[3]「ここで『平準化』というのは、所得や教育や職業威信など階層的地位それ自体の格差の縮小と、意識における中間層化との両方を含む。また、『大衆社会』という語は、ここでは完全に価値中立的に用いられており、大衆社会論でしばしばなされるようなマイナスの含意はこめられていない」（富永、前掲書、253頁）。

[4] 富永、前掲書、228、245-248頁。

[5] 富永、前掲書、253頁

[6] 岩佐淳一「社会学的青年論の視角――1970年代前半における青年論の射程」小谷敏編『若者論を読む』世界思想社、1993年、12、13頁。

[7] 1991年から若者のライフスタイルを調査した宮本らによると、学卒後就職したあと結婚するまでの期間が従来よりも延びたため、この期間実家の両親に依存する状態が続いているという。宮本らは青年期に関するエリクソンの議論を検討し、この時期を青年期と成人期のはざまとして「脱青年期」と呼んだ（宮本みち子・岩上真珠・山田昌弘『未婚化時代の親子関係　お金と愛情にみる家族のゆくえ』有斐閣、1997年、6頁）。

表　総人口等の推移

	総人口	15-24歳人口	15-24歳労働力	高等学校生徒数	大学生数
1950年	84114574	18282000	11255000		
1955年	90076594	17017400	11066300	2050286	523355
1960年	94301623	17687500	11284500	2720416	626421
1965年	99209137	20065400	11316900	4559757	937556
1970年	104665171	19894680	11585873	3859528	1406521
1975年	111939643	17020055	8444746	4089697	1734082

出典：人口及び労働力状態は「国勢調査」、学校生徒数は「学校基本調査」

きこもり」論[9]につながる笠原嘉の「ステューデント・アパシー」[10]も70年代に論じられている。

70年代以降、その時点その時点での若者の状況が論じられるのみならず、その状況がどのようにして至ったものであるのかを把握するべく、若者文化の歴史社会学的研究がおこなわれてきた。代表的なものとしては、幕末から70年代までのユースカルチャーを追った坂田稔[11]、戦後の若者文化の変遷を追った桜井哲夫[12]・高田昭彦[13]・中野収[14]・岩間夏樹[15]らの研究がある。先のシンポジウム「青年問題」で扱われていたのは、大学生に代表される高学歴の若者であったが、戦後若者文化の歴史社会学的研究においても、その高学歴の若者像が過去に投影されその連続性が論じられてきた[16]。しかしながら、総人口・15-24歳人口の推移及び15-24歳人口の内訳の推移を示した表並びに図から、1970年代初頭まで勤労青少年は15-24歳人口の中でも多数を占めていたことがわかる。このことからも、上記の研究は、研究者にとって身近な存在である学歴エリート中心にまなざされたものであり勤労青少年が後景に退いた、あまりにも「近視眼的」なものである[17]。

このような事態が起きた一因は、研究者が、たとえば自分自身の体験やその日常における大学での学生との接触の経験といった、いわば感覚的な次元から議論を進める傾向があることにあると考えられる。それのみならず、1950-60年代において勤労青少年研究が（次節に見るように）盛んにおこなわれていたのにもかかわらず、それらが「若者論」と

---

[8] 小此木啓吾『モラトリアム人間の時代』中央公論社、1981年。

[9] 斎藤環『社会的ひきこもり――終わらない思春期』PHP研究所、1998年。

[10] 笠原嘉『青年期　精神病理学から』中央公論社、1977年。

[11] 坂田稔『ユースカルチュア史　若者文化と若者意識』勁草書房、1979年。

[12] 桜井哲夫『ことばを失った若者たち』講談社、1985年。

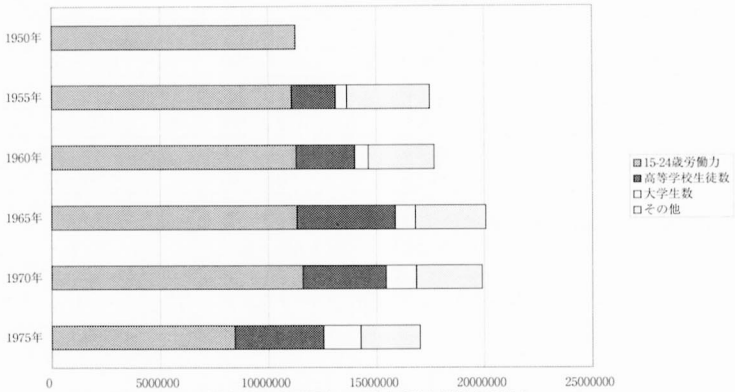
[13] 高田昭彦「サブカルチュアとネットワーキング――現代青年の特質と戦後日本の青年文化――」庄司興吉・矢澤修次郎編『知とモダニティの社会学』東京大学出版会、1994年。

[14] 中野収『現代史のなかの若者』三省堂、1987年。

[15] 岩間夏樹『戦後若者文化の光芒』日本経済新聞社、1995年。

[16] たとえば、坂田稔や高田昭彦は、戦後若者文化の嚆矢を1955年に流行語ともなった「太陽族」に求め、現在に至るその連続性を辿っている（坂田、前掲書。高田、前掲論文）。

図　15-24歳人口とその内訳の推移



出典：人口及び労働力状態は「国勢調査」、学校生徒数は「学校基本調査」

してあとの時代から検討されることが乏しいことが、大きな要因なのではないかと思われる[18]。すなわち、同時代の遺産が忘れ去られているのではないか。この同時代の勤労青少年研究を概観しそこにおいて勤労青少年がどのようにまなざされていたのかを検討する作業は、次節においておこなう。

学歴エリート研究並びにこれら学歴エリート中心の若者文化研究の成果から、戦後若者文化の流れを学歴エリート中心に整理すると、次のようになる。

竹内洋によると、1950-60年代の大学生においては、キャンパスでは少数派であったものの教養主義が支配的な文化であった。そして、戦前の教養主義の特徴は人格主義とエリティズム、戦後の教養主義の特徴は進歩主義（社会革新）と平等主義であった[19]。この戦

---

[17] 柳田国男の『明治大正史世相篇』を継承するべく著された『世相史』の冒頭で加藤秀俊は、エリートの歴史を「正史」常民の歴史を「稗史」とする区分を紹介し（『加藤秀俊著作集3　世相史』中央公論社、1981年、11頁）、「『稗史』の立場は、政治の立場ではなく、生活の立場である」（同書、13頁）と述べている。また、鶴見俊輔は、カナダのマッギル大学における講義の中で高度成長期におけるマクロな社会の変動と人びとの日常生活とのつながりを論じる際、後者を考える導きの糸として柳田国男の『明治大正史　世相篇』の記述に言及している。この書物を紹介するとき、鶴見は次のようにいう。「この本には名高い人のしたこととか、歴史上の大事件などは出てきませんで、民衆のくらしについての材料を新聞記事から広く採ってあります。この続きを1960年代に対してどのように書くことができるかは、今日の日本の学問にとってひとつの問題となるでしょう」（鶴見俊輔「くらしぶりについて」（『戦後日本の大衆文化史――1945～1980年――』）『鶴見俊輔集5　現代日本思想史』筑摩書房、1991年、146頁）。1950-60年代の若者文化をエリート中心ではなく勤労青少年をも踏まえたかたちで把握することへの示唆の一端は、上記の研究から得た。

[18] 小谷敏らは、1970年代における主要な若者論者である井上俊・栗原彬・小此木啓吾らの議論を評価する一方で、1980年代以降の若者論がマーケッターにより仕掛けられたものであるとし、その若者像が都市中心であることなどに批判を加えている。だが、皮肉にも、本文であとに述べる1950-60年代における勤労青少年研究の蓄積が踏まえられた議論がなされているわけではない。それも、こうしたレビューの不在に関わりがあると思われる（小谷編、前掲書）。

[19] 竹内洋「学歴エリート・教養・文化資本」宮島喬編『講座社会学7　文化』東京大学出版会、2000年、78頁。

後日本におけるエリートの進歩主義を見田宗介は、次のように整理している。

1950年代においてエリートの間で支配的であった2つの大文字の理想は、アメリカン・デモクラシーの理想とソビエト・コミュニズムの理想である。この両者は対立しながら、共にこの時期の「進歩派」として、「現実」主義的な保守派の権力と対峙していた[20]。この時代の「理想」主義者と「現実」主義者の最後の決戦となったのは、日米安保条約の改定＝継続に対する1960年における闘争の昂揚であった。これは、アメリカン・デモクラシー派とソビエト・コミュニズム派2つの「理想」主義的な党派が結束し共同して「現実」主義者の権力にぶつかったものであった[21]。

一方、1960年代末からの数年間全共闘運動の攻撃の目標は次の3つであった。それは、第1にアメリカン・デモクラシー派の理想主義の現実（「戦後民主主義」）であり、第2にソビエト・コミュニズム派の理想主義の現実（「スターリニズム」と「旧左翼」）、第3に「現実」主義者の理想の実現がもたらしたもの（「近代合理主義」とその「管理システム」）であった。要するにプレ高度成長におけるさまざまな「理想」のかたちに対する、全面的な反乱だった[22]。高田によると、この運動は、経済成長とそれに続く「いざなぎ景気」（1965-70年）を背景に「豊かさ」を享受した、上・中流階級の子弟によるものであった[23]。

1970年代に入り、教養主義は衰退する。その要因は次の3つにある。その第1は、サラリーマンの大衆化である。大正末期から昭和のはじめにかけてサラリーマンは「知識階級」であり、1970年ころまでの大学生文化における教養主義の存続は、身分としてのサラリーマンの存続と相関していた。しかし高等教育進学率の上昇とともにサラリーマンが「グレーカラー」化した[24]。第2は、農村型社会の崩壊である。克己・勤勉・規律などの農民的エートスを土台にしながら（すなわち学歴ノン・エリートの修養主義と共約的であり）西洋文化の香りをもたらしたのが、「日本型教養主義」[25]だった。しかし、1965年以後、農村と都市の生活様式にほとんど格差がなくなり、農村型社会から都市型社会への変化がおきた。そして日本と西洋との文化格差さえも消滅した[26]。第3は、「『新中間大衆社会』の構造と文化」[27]である。これを竹内は、教養主義崩壊の決定的要因としている。この文化は「『サラリーマン』型（引用者注：この「サラリーマン」とは「知識階級としてのサラ

---

[20] 見田宗介『現代日本の感覚と思想』講談社、1995年、12、13頁。
[21] 見田、前掲書、16頁。
[22] 見田、前掲書、24、25頁。
[23] 高田、前掲論文、223頁。
[24] 竹内、前掲論文、72頁。
[25] 竹内、前掲論文、73頁。
[26] 竹内、前掲論文、76頁。
[27] 竹内洋『教養主義の没落　変わりゆくエリート文化』中央公論新社、2003年、233頁。

リーマン」ではなく、70年代以降の「グレーカラー」化したサラリーマンの意である）人間像つまり大衆平均人間にむけて強力な鑢をかける文化である。こうした意味での『サラリーマン』文化の蔓延と覇権こそ教養主義の終わりをもたらした最大の社会構造と文化である」[28]。

それでは、1970年以降の「グレーカラー」化したサラリーマン・学歴エリートの若者たちの意識はどのようなものであったのか。栗原彬によると、学歴エリートの多くは、産業社会の産物であるモラトリアムを社会的には終えても内面に維持したまま、社会に参加していった[29]。こうした現象を井上俊は「精神的失業」[30]と呼び、小此木啓吾は、「モラトリアム人間」[31]と呼んだ。先に1950-60年代の学歴エリートの理想主義を見たが、1980年代に入ると、かつては理想主義の主体であった若い世代において理想主義的傾向の衰退が著しいことが指摘されている。この衰退は政治意識のみならず日常生活やライフスタイルにも現れているという。また、教養主義や文化的スノビズムが衰退し、スノビズムは商品消費の領域に移行したとされる[32]。

以上、若者文化史が学歴エリート中心に描かれてきたことを見たあと学歴エリートの文化の変遷を概観したが、同時代たる1950-60年代において勤労青少年はどのように論じられていたのであろうか。次にそれを見ることにしたい。

2．1950-60年代の勤労青少年研究
―― 施策を受け導かれるべき存在としての若者像 ――

1950-60年代当時、『教育社会学研究』第7集特集「勤労青少年教育」（1955年）・『文部時報』第956号特集「勤労青少年教育問題」（1957年）・『社会教育』第20巻9号特集「職場青年の学習課題」（1965年）『地域開発』特集「若年労働力の流入と定着について」（1967年3月号）などさまざまな雑誌で勤労青少年の特集が組まれている。

当時の社会学者による勤労青少年研究は、質問紙を用いた計量的調査による研究が中心である[33]。そして、たとえば東京学芸大学社会学研究室が行った、山形県新庄市・天童市

---

[28] 竹内、前掲書、236頁。

[29] 栗原彬『やさしさのゆくえ　現代青年論』筑摩書房、1994年、150頁ほか。

[30] 井上俊『死にがいの喪失』筑摩書房、1973年、62頁。

[31] 小此木、前掲書。その一方で、ヒッピー等の「部族」といった、「文化的離反者」が現れた。ヒッピー等は少数派ではあったものの、同時代の若者の心情を象徴するものであった（井上、前掲書、40、41頁）。

[32] 井上俊「文化の『日常化』について」『社会学評論』134号、1983年、34、35頁。

の3年間に渡る卒業生のうち京浜地区に流入した者全員への追跡調査[34]など数多くの労作が見られるが、これらが今日顧みられることは乏しい。

この時期の勤労青少年研究のテーマは、大きく次の2つに分けることができる。それは第1に労働であり第2に学習である。『教育社会学研究』誌上では1950-60年代盛んに勤労青少年研究の論考が発表されており、それらを中心に以下に整理し紹介したい。

第1のテーマである「労働」においては、労働環境への適応が中心に論じられている。そして、その文脈は次の2つに分けることができる。それは、①職場への適応②（大都市への流入青少年の）都市環境への適応である。

①の職場への適応を扱ったものとしては、1950年代「年少労働者には著しい転職の現象が一般的に見られる」[35]ことから、特に転職が問題とされた。また、②の文脈とも重なることだが、1960年代には都市への流入青少年がたびたび転職をくり返すことが問題とされた[36]。

さらに、1960年代に入り集団就職をはじめ多数の青少年が流入する事態を迎えると、②の流入青少年の適応に関する研究が多数行われている。たとえば、天野郁夫は「流入青年の生活は、連続よりも断絶がその基調となり、かれらは変動する社会のなかでの青年期の危機を最も集約的に経験することになる」[37]という。天野は流入青少年をこのように位置

---

[33] その中には、国（総理府・労働省・文部省）や地方自治体が社会学者に委託あるいは社会学者との共同研究のかたちで発表されているものも見受けられる。また文部省科学研究費を受けた勤労青少年の実態調査（おもに計量的調査）も行われている。行政からの委託等でなされたもののうち、国の委託でなされたものとしては、1965-1966年にかけて発表された総理府中央青少年問題協議会の『青少年問題研究調査報告書』を挙げることができる。これは、6分冊のうち3冊が勤労青少年研究となっている（岩井弘融による『都市化と勤労青少年集団に関する研究　（青少年問題研究調査報告書40-2）』（1965年）、清水義弘・河野重男・佐藤暢男・関口禮・山村健・田村栄一郎・草谷晴夫による『勤労青少年と監督者の職場生活をめぐる意識および相互関係についての研究　青少年問題研究調査報告書40-3』（1965年）、『勤労青少年の職場適応と行動規範の形成および発達に関する研究　青少年問題研究調査報告書40-5』（1965年））。地方の委託でなされたものとしては、神奈川県教育センターの委託で東京大学教育社会学清水義弘研究室によって1960年代神奈川県下において行われた一連の調査（調査結果の要旨は、清水義弘・潮木守一・天野郁夫「現代青少年の職業意識」<1>～<6>、『産業教育』第16巻第1号～第16巻第6号、1966年。1966年に行われた調査に関しては、清水義弘・天野郁夫「若年労働者の適応と定着の一考察」『地域開発』1967年3月号）が挙げられる。また、調布市教育委員会と東京学芸大学社会学研究室との共同調査「調布市勤労青少年生活実態調査」がある。科研費を受けての研究としては、調布市教育委員会（松浦孝作・菊池美代志・橋本敏雄・勅使河原勝男・大和田一紘・似田貝香門・松浦直道）『調布市勤労青少年生活実態調査』、1968年、橋本敏雄「勤労青少年の職場定着性――調布市における調査報告――」『東京学芸大学紀要　第3部門』第22集、1970年、を挙げることができる。

[34] 調布市教育委員会（松浦孝作・菊池美代志・橋本敏雄・勅使河原勝男・大和田一紘・似田貝香門・松浦直道）、前掲報告書、橋本、前掲論文。

[35] 年少労働研究会「転職を中心としてみた年少労働者の生活と教育」『教育社会学研究』第7集、1955年、16頁。

[36] 流入青少年も含めた調査として、東京都（橋本重三郎ら）『昭和45年度東京都青少年問題調査報告書　勤労青少年の職場移動』、1971年、を挙げることができる。

づけた上で「流入青年の新しい生活への適応の問題は、かれらのこうしたつよい自発的な集団所属への要求を前提として考えられねばならない」[38]という。同様の視座は、都市における勤労青少年サークルの調査研究においても見受けられる[39]。すなわち、勤労青少年サークルに関しては、そうした流入青少年の都市への適応を助けるものという前提のもと研究がなされていたのである。

第2のテーマである「学習」に関しては、③社会教育④定時制高校⑤企業内教育の3つの文脈がある。

まず、③の社会教育に関しては、主に青年学級が扱われている。戦後農村において自発的に生まれ1949年頃には全国的に広がった青年学級が、1953年の青年学級振興法によって法制化された。これを扱った研究としては、たとえば、新潟県における調査からよりよい青年学級の運営を検討した柴野清一の研究を挙げることができる[40]。

④の定時制高校に関しては、たとえば、学習意欲があるにもかかわらず勤労青少年の定時制高校通学を阻んでいる条件を調査した渡辺祥輔の研究がある[41]。

⑤の企業内教育に関しては、企業内の技能者養成所が取り上げられている。たとえば、山口富造は企業内技能者養成所の生徒へのアンケート調査から、企業が従業員のモラール（勤労意欲）を高めていくための問題点を探っている[42]。

そして、勤労青少年研究はこの第1と第2のテーマを別個の問題関心として行われていたわけではないと考えられる。たとえば、年少労働研究会（日比行一・浜島朗・青井和夫・田代元彌・扇谷尚・細谷俊夫）は次のようにいう。「（引用者注：年少労働者の転職の）重要な原因となるのは彼らが結局不熟練労働者ないし半熟練労働者であるという事実である。こうして不熟練者を半熟練者に、半熟練者を熟練者にまで高めて行く教育を与えることこそ、真に彼らを安定させ、その職業に専念させることを保障する方策となるのである」。

---

[37] 天野郁夫「現代青年の生活構造と意識――流入青年の適応過程の分析――」『教育社会学研究』第22集、1967年、19頁。

[38] 天野、前掲論文、27頁。

[39] 前掲、『都市化と勤労青少年集団に関する研究　（青少年問題研究調査報告書40-2）』、『調布市勤労青少年生活実態調査』。

[40] 柴野清一「新潟県における青年学級の現状と問題点」『教育社会学研究』第7集、1955年。

[41] 渡辺祥輔「働く年少者の教育の実態」『教育社会学研究』第3集、1952年。

[42] 山口富造「職場における人間関係――A社技能者養成所の生徒指導をめぐって」『教育社会学研究』第17集、1962年。なお、1956年には日経連は事業内職行訓練と定時制高校・通信制高校との連携を強化する方針を打ち出した。このような産業界の要請に基づいて、中央教育審議会は「勤労青少年教育の振興方策」について、定時制高校に通学する生徒が技能者養成施設において一定の基準に適合する職業技術教育を受ける場合にはこれを当該高等学校の教科の一部を履修するものとみなすようにすることを答申した。それが1961年の「学校教育法等の一部を改正する法律」によって具体化された（佐藤暢男「工業化と勤労青少年教育」『教育社会学研究』第23集、1968年、64、65頁）。

「職場教育の施設をどうして育成するか、特に中小企業のそれをどう組織化するか、こうした職場教育の施設と定時制高校との連関をどうつけるか。こういった問題が年少労働者の生活と教育を考えるわれわれに対して解決を迫っている。われわれは転職の問題から引き続いてこうした年少労働者教育の問題に一段と深い掘り下げを試みたいと考えている」[43]。このように、労働への適応の非常に重要な媒介として、学習が見なされていた。すなわち、上記の2つのテーマは、相互に関わり合っていたのである。

これらの研究から浮かび上がってくる勤労青少年像は、（調査研究をもとにした）何らかの施策を受け導かれるべき存在としての勤労青少年像である。つまり、これらの多くは産業社会のための研究であったと言えるのではないか。しかし、当時の勤労青少年に最も愛読された雑誌『平凡』を繙くとき、われわれはそこに、10万人以上もの会員を誇った読者組織「平凡友の会」をはじめ、勤労青少年文化の活発な展開を知ることができる。勤労青少年の文化的側面に対するまなざしが乏しい上記の研究に対し、次節では1950-60年代の勤労青少年文化を解明するに当たり軸となる媒体として『平凡』を位置づけ問題設定をおこなう。

3．大衆娯楽雑誌『平凡』を軸とした勤労青少年文化把握に向けて

3-1．『平凡』というメディア

1950-60年代の学歴エリートの教養主義において、「人々は、総合雑誌をつうじて教養主義者になったが、同時に総合雑誌の購読によって教養共同体を形成していた」。「まさしく総合雑誌は知識人の公共圏を形成する媒体であった」[44]。それに対し、当時勤労青少年に最も愛読されていたのは、大衆[45]娯楽雑誌『平凡』『明星』であった。1950-60年代の教養主義的学生が総合雑誌の「読者共同体」（シャルチェ[46]）であったとすると、勤労青少年は『平凡』『明星』の「読者共同体」であった。特に『平凡』は、当時『明星』よりも

---

[43] 年少労働研究会、前掲論文、17頁。

[44] 竹内、前掲書、19頁。

[45] 日本語の「大衆」が「いわゆる大衆社会論が論じた社会構造上の意味だけではなく、大正期あたりから目立ち始める『民衆』『通俗』といった語の範囲を含みこんで拡がっていった事実は無視できない」（佐藤健二『歴史社会学の作法　戦後社会科学批判』岩波書店、2001年、195頁）。本稿で『平凡』を「大衆娯楽雑誌」というときの「大衆」は、エリートの対極としての後者の意味で用いる。Ivy, M., 'Formations of Mass Culture', in Gordon., A., (eds) Postwar Japan as History, University of California Press, 1993, pp.240,　辻泉「ポピュラー文化の危機――ジャニーズ・ファンは“遊べているのか”――」宮台真司・鈴木弘輝『21世紀の現実　社会学の挑戦』ミネルヴァ書房、2004年、11、12、45頁、も参照。

高い支持を得ていた。まさしく『平凡』は勤労青少年文化を代表する媒体であった。

同誌の詳細な沿革は別稿[47]に譲るとして、その簡単な沿革を以下に紹介しておきたい。1945年文芸誌として創刊された『平凡』は1948年に“歌と映画の娯楽雑誌”へとリニューアルを遂げ、読者の支持を得て1955年には部数を140万部にまで伸ばした。当時『平凡』は流行歌と映画を2つのテーマとし、誌面は連載小説・グラビアを2本の柱としていた。そして、連載小説・グラビアはそれぞれ映画及び（流行歌を伝える）ラジオと立体的に且つ複雑に結び付いていた。また、多様な読者参加企画を展開していた。1960年代に入り『平凡』はテレビの普及に伴うマスメディアの再編とともに“歌と映画の娯楽雑誌”としての姿を解体させた。1970年代にはアイドル雑誌へと変貌し、1987年に休刊を迎えた。この変遷に伴い、『平凡』の主要な読者層は1950-60年代は男女の勤労青少年（女子の方が多い）であったが、1970年代以降小・中・高校生の主に女子に移っていった。

『平凡』に関するこれまでの議論を、その問題関心に沿って次の2つに整理することができる。

それはまず第1に、『平凡』の「見る雑誌」としての性格に特に着目した議論である。この「見る雑誌」論の系譜については既に別稿で整理した[48]が、鶴見俊輔が1954年に発表した「見る雑誌の登場」及び[49]この議論を更に発展させ平凡出版（現・マガジンハウス）の百万部雑誌『平凡』『週刊平凡』（1959年創刊）『平凡パンチ』（1964年創刊）の流れを「見る雑誌」である『平凡』から（雑誌に書かれた情報を基に生活を）「する雑誌」である『平凡パンチ』への流れであると論じた江藤文夫の議論[50]を中心とするものである。鶴見・江藤らの論は、知識人の間においては『平凡』への評価が極めて低かった時代に『平凡』に積極的な意義を見出した、先駆的な業績である。だが「見る雑誌」論は誌面の内容に重点を置いた考察であり、読者までも含めて戦後大衆文化における『平凡』の意義を検討したものとは、言い難い。即ち、内容に重点が置かれている点では『平凡』を批判する同時代の言説と共通している。

第2の議論は『平凡』の読者層に着眼した議論である。これは、まず思想の科学研究会の身の上相談研究に見出すことができる[51]。この中で鶴見は「『平凡』などを通して結ばれている」読者層を「戦後育ちの（第3次くらいにあたる）戦後派」[52]としている。また加

---

[46] ロジェ・シャルチェ（長谷川輝夫訳）『書物の秩序』筑摩書房、1996年、序、第1章。

[47] 拙稿「『平凡』の42年」『出版研究』33号、2003年。

[48] 拙稿「『平凡』読者の連帯と戦後大衆文化」『マス・コミュニケーション研究』60号、2002年、123、124頁。

[49] 鶴見俊輔「見る雑誌の登場」『大衆芸術』河出書房、1954年。

[50] 江藤文夫『見る雑誌する雑誌　平凡文化の発見性と創造性』平凡出版、1966年。

藤秀俊は「『平凡』は戦後の若い世代のなかに異常な発行部数をもって浸透した新しい型の大衆雑誌であるということ」[53]から『平凡』に着目し同編集部に寄せられた身の上相談の投書200通余りを分析した。これらの研究の少し後に『平凡』読者層を検討した研究として、原喜美による研究がある[54]。最近の研究では吉澤夏子の研究がある[55]。これらは、『平凡』が戦後若い世代の圧倒的な人気を誇っていたことに着眼したものである。

それでは、『平凡』読者と近代日本を代表する大衆雑誌『キング』（1925年創刊、57年休刊。講談社）読者とはどのように対比できるであろうか。更には1950-60年代当時の進歩主義的な学生文化とはどのような位置関係にあったのであろうか。次にそれを検討したい。

3-2．勤労青少年文化と大学生の文化との断絶

佐藤卓己によると、『キング』は、「性別も年齢も階層も地域も異なる『国民』が」「同一の読物をほぼ同時に読むという」「未曾有の」「経験」をもたらし、「大衆的な世論を組織する新しい公共空間」を出現させた[56]。そして、「読者の『階級』『世代』『性差』による利害対立を『国民』という抽象度の高い次元で解消し、個人の主体性や自主性をシステム資源として動員することを可能にした」[57]「究極の国民雑誌」[58]であった。戦前の百万部雑誌『キング』が「共感による合意形成を組織するファシスト的公共性の日本的形態」

---

[51] 第1、第2の議論に共通する1950年代前半当時の『平凡』躍進期において同時代になされた鶴見・加藤らの議論は、知識人と大衆の間に断絶の見られた当時において大衆を理解し大衆と交流を図ろうとした思想の科学研究会の思想運動の中で行われたものであった。

[52] 鶴見俊輔「身上相談」『鶴見俊輔著作集5　現代日本思想史』筑摩書房、1991年、407頁（初出は1956年）。

[53] 加藤秀俊「身の上相談の内容分析」『加藤秀俊著作集4　大衆文化論』中央公論社、1980年、98頁（初出は1953年）。なお加藤氏にはこの論文執筆当時のことを2003年9月10日に教えていただいた。記して感謝したい。

[54] この中で原は、次のように指摘している。「“平凡”読者層の大半は、義務教育を終え直ちに実社会に巣立っていく若い人々である。昭和33年の中学校卒業者の高等学校進学率が、53.7％であるということから考えても、中学校卒業者の約半数は、卒業後殆ど組織的な教育の機会を与えられず、社会の下積みとなって、農業、漁業、工場労働、家事労働に、営々として従事し、日本の産業を担い、やがては、社会の中堅として世論を構成していく人々である。この層に“平凡”の購読者が多いということは、一層研究の必要性を加えるものと考えられる」（原喜美「青少年向け娯楽雑誌『平凡』にあらわれた価値志向」『国際基督教大学学報Ⅰ-A　教育学研究』7、1960年、248頁）。

[55] 吉澤夏子「性のダブル・スタンダードをめぐる葛藤――『平凡』における＜若者＞のセクシュアリティ――」青木・川本・筒井・御厨・山折編『近代日本文化論8　女の文化』岩波書店、2000年。吉澤と視座を共有するものとして、石崎裕子「1950年代の『平凡』を読み解く――「働くこと」と「性」に関する記事を中心に――」『日本女子大学大学院人間社会研究科紀要』第8号、2002年、中川敏子「会員名簿から見た1950年代の『平凡』読者像」『日本女子大学大学院人間社会研究科紀要』第8号、2002年、三品裕美「『平凡』の民主主義――〈スタア〉と皇太子の親和性――」『日本女子大学大学院人間社会研究科紀要』第8号、2002年、がある。

[56] 佐藤卓己『「キング」の時代――国民大衆雑誌の公共性』岩波書店、2002年、41頁。

[59] であったのに対し、戦後の百万部雑誌『平凡』は、勤労青少年を中心とした若年層に読まれ、日本の雑誌史上おそらく最大規模の読者組織「平凡友の会」が生まれるなど、同誌を舞台とした、「動員」とは異なる、勤労青少年の文化的営みが見られた。

この『平凡』読者について吉澤は、「『平凡』は、まさに」「〈若者〉を対象にした雑誌だった」と言う。吉澤によると、「戦後の民主主義的・男女平等的な政策を背景に、若い男女が同性同輩集団において別々に社会化されるという慣習が廃れていったとき、〈若者〉＝若い世代の男女、という新しいカテゴリーが登場した」。これは、「安保闘争における若者／大人という明確な対立図式を背景に（頂点に）、男性も女性も同等に自らを同一化することのできるカテゴリーとして機能した」[60]。吉澤の言う〈若者〉の主要な構成層は、表・図からも、勤労青少年である。そして、こと『平凡』に限れば、この〈若者〉のカルチャーには、進歩主義にもとづく対抗文化的な要素は希薄である。『平凡』誌面全般を見ても対抗文化的なメッセージは乏しい。たとえば、読者組織「平凡友の会」のモットー「元気で働き、愉快に遊ぼう」からも、そのことを窺えよう。その活動が全国規模で広範に展開された「平凡友の会」は、「安保闘争における若者／大人という明確な対立図式」また1-1で見たエリートの理想と保守派の現実という対立の構図とは、かけ離れたものであった。政治運動や対抗文化に結びつくものではなかったのである。

「平凡友の会」やこのあと紹介する読者の文通は勤労青少年達の「創造的エネルギー」[61]が発揮されたものであり、この「創造的エネルギー」の発揮は、復興から高度成長に至る日本の生産力を支えていた勤労青少年の労働と結びついたものであった。若年層の在り方が社会的な問題となっている今日[62]、上記の時期における勤労青少年文化においてこの2つが結びついていたことからも、この文化を再検討・再評価していくべきではないか。

ところで、1950年代の『平凡』において最も重要なスターのひとりに美空ひばりがいる。そのファンの層について竹中労は次のように言う。「ひばりが歌舞伎座でリサイタルを開いたのは、サンフランシスコ講和条約発効の日（引用者注：1952年4月28日）であった。彼女の歌に魅せられて集まった後援会のメンバーは、戦争中疎開っ子であった10代、もし

---

[57] 佐藤卓己「キングの時代　ラジオ的・トーキー的国民雑誌の動員体制」青木・川本・筒井・御厨・山折編『近代日本文化論7　大衆文化とマスメディア』岩波書店、1999年、230頁。

[58] 佐藤、前掲書、32頁。

[59] 佐藤、前掲書、217頁。

[60] 吉澤、前掲論文、207、208頁。

[61] 久野収・鶴見俊輔『現代日本の思想――その五つの渦――』岩波書店、1956年、202頁。

[62] 宮本・岩上・山田、前掲書、斎藤、前掲書、山田昌弘『パラサイト・シングルの時代』筑摩書房、1999年、宮本みち子『若者が《社会的弱者》に転落する』洋泉社、2002年、玄田有史・曲沼美恵『ニート――フリーターでもなく失業者でもなく』幻冬舎、2004年、ほか。

くは20代前期の働く青年男女だった」[63]。「3日後の5月1日、おなじ日本の若ものたちが、歌舞伎座と目と鼻の先の皇居前広場で、鮮血を流して警官隊となぐりあい、アメリカ兵を濠の中に投げこんだ……血のメーデー。（略）血のメーデーに傷つき倒れた全学連の若ものたちと、美空ひばり後援会の働く青年男女とを思いあわせるとき、私は深刻な感慨にとらわれるのだ。それから10年以上の時が流れた。2つの若い集団には、連帯の橋が架けられたであろうか。日本民衆的なるものの高揚は、時と場所とをほとんど同じくしながら、ついに歩みよることがなかったではないか」[64]。このようにこの勤労青少年の文化は、同時代の進歩主義的な学生の文化とは大きな隔たりのあるものであった。

また、たとえば、思想の科学研究会会員で京都大学経済学部生だった西村和義氏は、「新しい日本を作り平和な住みよい日本を作る」ため「学校で学ぶ機会に恵まれた者と」「その機会に恵まれず農村や漁村で働いている青年の方々との間」に存在する「非常に大きな溝」[65]を埋めるべく、在学中の1953年、『平凡』の文通欄「お便り交換室」に投稿。同年7月号に掲載され1年間で1150通もの手紙を国内外から受け取り、京大や同志社等の学生約150人を集め返事を書く文通運動を行った。1954年当時、この運動を報告する文章の冒頭で氏は次のように綴っている。

「知識人や学生は、ラジオから流れてくる流行歌だの、お涙頂戴映画だの、書店の店頭に並んでいる娯楽雑誌だのを、低級な、卑俗なものだといって非難します。その非難のカゲには、自分達の方が、美空ひばりのファンより優等生だという考えがひそんでいます。しかし、日本人がみんな手をとりあって生きてゆくためには、この非難こそ非難さるべきではないでしょうか」[66]。

なお、西村氏が文通運動への協力を仰いだ学生の中には、氏が『平凡』に投書したことを「大学生として恥ずかしいことをした」[67]と氏を批判した者もいたという。これらから、西村氏のような問題意識の持ち主やその協力者においても、その内面においては学生文化と勤労青少年文化との間の「溝」が当初深いものであったことを窺い知ることができる。

同時代には多数派でありながらも、学歴エリートの文化から離れたところに位置してい

---

[63] 竹中労『美空ひばり』朝日新聞社、1987年、96頁。
[64] 竹中、前掲書、97、98頁。
[65] 西村一雄「乙女たちは考える――『平凡』読者との文通――」『思想の科学』1954年5月号、59、60頁。
[66] 西村、前掲論文、59頁。
[67] 西村、前掲論文、61頁。

たためか今日の時点から光が当てられることの乏しい勤労青少年の文化の解明を行っていく上で、『平凡』を軸に、誌面・「送り手」・「受け手」を把握していくことは極めて有効である。また、その関係者の高齢化を考えると、その研究は現時点が遂行可能な最後の機会だと考えられる。こうした研究の成果については別稿に譲ることにしたい[68]。

謝辞

『平凡』を軸とした本研究を進めるにあたりあたたかい御理解と多大な御助力をくださっている、新井恵美子氏・木滑良久・中丸巌氏をはじめとする多くの関係者の皆様並びに西村和義氏に深く御礼申し上げたい。

（さかもと　ひろし・研修員）

---

[68] その成果を既に著したものとして、『平凡』が飛躍的に部数を伸ばし発行部数100万部を突破した1950年代前半の読者像については、前掲「『平凡』読者の連帯と戦後大衆文化」を、当時の『平凡』誌面とラジオ・映画との結びつき並びにその受容経験に関しては、「1950年代前半における大衆娯楽雑誌の受容経験――『平凡』の共同体的受容と共振性――」『京都社会学年報』第9号、2001年、「『平凡』の研究――1950年代前半におけるラジオとの立体的なイメージ構成の創造を中心に――」『日本出版学会会報』第107号、2002年、を参照されたい。また、1960年代の『平凡』『明星』でたびたび取り上げられ当時社会現象となっていた勤労青少年サークル「若い根っこの会」に関しては、「戦後日本における『勤労青年』文化――『若い根っこの会』会員手記に見る人生観の変容――」『京都社会学年報』第8号、2000年、を参照されたい。これらの成果に本文中でも紹介した「平凡友の会」に関する知見の一部を加えたものとしては「雑誌『平凡』に見る1950-60年代勤労青少年文化の社会学的研究」、博士号取得論文（京都大学、2004年11月24日授与）がある。なお、本研究の全体像や展望等の紹介を広く行っている（「ニュー・エイジ登場」（第197回～第200回）『週刊読書人』2003年1月31日号～2月21日号）ので、こちらも、参照されたい。

The Present Situation and the Prospect of the Young Laborers Study of 1950-60's : Toward a Study of Mass Amusement Magazines

Hiroshi SAKAMOTO

The aim of this paper is to provide a new perspective to the young laborers studies of 1950-60's in Japan, by investigating two major mass amusement magazines of the time, "Heibon" and "Myojo".

Young laborers in 1950-60's had been an important figure in the history of post-war youth culture in Japan. Not only they were large in number, but also they directly supported Japan's reconstruction and rapid economic growth after the war. Regardless of these facts, however, the cultural aspects of these laborers have rarely been discussed in former studies. In these studies, either the contributions of the "elite" (those with high education) or the aspects of governmental policy were spotlighted.

In 1950-60's, so-called "culturalism" was hegemonic among university students. While many of them read magazines that provide topics of general cultural interests, young laborers read "Heibon" and other mass magazines for fun with great enthusiasm. The representative of mass magazines in pre-war Japan was "King". It is said to have played an important role to mobilize the Japanese mass to support the war. "Heibon" has played different cultural roles in the course of its development. One example was the activities of its readers association, "Heibon-Tomo-no-Kai". Their activities were also different from that of elites.

I have interviewed both the creators and readers of this magazine to show the cultural development that emerged from interactions between them. The full discussion has been presented in other papers.